

〈幸せは、帰る所にある〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

南イタリアの大都会ナポリのある家族の話である。主人公ロレンツォ（カルペンティエーリ）は引退した元弁護士で、かつて家族と暮らした大きなアパートに独りで暮らしている。寄る年波の身には、エレベーターのない建物の階段を重い水や食料品を下げて五階まで歩いて上るのは楽ではない。

ある日、向かいの部屋の前で蹲る女性を見かける。最近一家四人で越して来たばかりだというミケーラ（ラマッツォッティ）で、鍵を持たずに出かけて部屋に入れないで困っていた。かつては向かいの部屋もロレンツォの家で、部屋同士は広いバルコニーでつながっている。ミケーラを自宅に招き入れ、バルコニーの柵の鍵を与えるロレンツォ。現役時代は辣腕弁護士として知られたロレンツォは不正裁判も多く手掛け、悪名も高いまま引退した。数年前に妻を亡くし、既に独立している娘と息

子との仲は険悪だ。最近では二人とアパートの権利問題でもめている。アラビア語の法廷通訳で生計を立てるシグルマザーの娘エレナ（メッツジョルノ）は、母の死は父ロレンツォの浮気が原因だとして父を許すことができない。

そんなロレンツォが、思いがけず知り合った隣人一家とベランダ越しに互いの家を行き来し、ミケーラの夫ファビオや子どもたちとも、一緒に過ごすようになる。皆でくつろぐ様子は、傍目にはまるで実の家族のようだ。

ある雨の夜、突然事件は起こった。外出先から戻ったロレンツォは、アパートを取り囲むバトカーの群れに驚く。制止を振り切り隣家に入ると、拳銃を握りしめたままこと切れているファビオの遺体が。妻と幼い二人の子どもを撃ち、自らも自殺したのだ。親しいと思っていたファビオの心の底には何があったのか。ロレンツォは意識不明の

まま病院に搬送されたミケーラのもとに駆け付ける。面会謝絶の病室に実の父親のふりをして入り込む。「ただ傍にいたかった」と。エレナと弟サヴェリオは「家族でもないのに」と父親を連れ戻そうとする。「家族か」と複雑な思いでつぶやくロレンツォ。

エレナは「孤独な父親が心通わせた隣人への思いやりでやったことです」と警察に弁明する。が、「俺の気持ちがお前なんかにはわかるか！」と声を荒げるロレンツォ。父親を庇おうとした娘の思いを拒絶されて、エレナは堪えきれずに病院を立ち去ってしまう…。向き合いたい家族の間のもどかしい心のすれ違い。傷つけ合い、また癒し合う父と娘の微妙な心模様が切ない。

この映画では誰もが孤独だ。明るい南イタリアの大家族で知られたナポリの街で、今では血のつながりが心をつなぐとは限らない。むしろ、つながっているからこそ、わかり合えない。この悲しみは、世界のどこにでも広がっている。幸・不幸、愛と束縛、家庭と自由：誰もが抱える苦しみ。解決のないジ・エンドへ向かうかに見えて、最後にほのかな光を灯す見事な演出。エレナが語るアラブの詩の一節が心に残る、「幸せはめざす場所ではなく、帰る家だ」と。

『ナポリの隣人』

イタリア映画 (108分)

監督：ジャンニ・アメリオ

出演：レナート・カルペンティエーリ、ミカエラ・ラマッツォッティ、ジョヴァンナ・メッツジョルノほか

2月9日より岩波ホールほか全国順次ロードショー

©2016 Pepito Produzioni

